

土屋論文へのコメント

一 疑問と妄想でこの事例を見直してみる 一

駒澤大学・やまき心理臨床オフィス 八巻 秀

はじめに

いや～感心しました。今回、土屋さん（+林・戸田さん）の論文をじっくり読ませていただきましたが、この事例に登場する IP・姉・母親の3名それぞれに対して、見事なチームワークで上手に対応され、この家族全体がより良い方向に向かっている感じは伝わってきました。（母親単独面接担当の方の論文もあれば、読みたかったですね～）インテークの合同面接から徐々に個人面接へと分かれていったケースですから、当然、個々の面接が家族システムとして複雑に絡んでいることを意識しながら担当することになるのは、仕方がないことでしょう。それ故に単なる個人面接とは違う、まさに「家族療法のような個人面接」を行うという難しさはあったかと思いません。土屋さんはじめ担当した皆さんにとっては、おそらくイニシャルケースかと思いますが、大学院時代に、このような難しい複雑な事例を担当されるとは、本当に良い臨床経験をされましたね。

私はこのチームの中の姉（=CI）担当の土屋さんへのコメントをとのことですから、土屋さんの論文を読みながら、浮かんできたいくつかの疑問や妄想（?）、そして感想などを、思いついたまま綴っていきたいと思います。思いついたまま（自由連想的に）書くつもりなので、少し読みにくくなるかもしれません。その辺はお許し下さいね。

IP はじめ家族の希望・ニーズにどこまで応えるべきだったのでしょうか？

初回の家族面接後の段階で、IP や家族の希望・ニーズに応える形で、徐々に IP・姉・母親それぞれの個人面接を導入していますが、この辺はインテークを担当された先生（おそらく東先生?）とチームメンバーとは、どのような話し合いがなされていたのでしょうか？ もしかしたら、先生からの「じゃ～あなたこれからお姉さん担当ね！」という突然の一方的無茶ぶりで自動的に担当が決定されていたのでしょうか？ いや、そんなことはないかな？（恥ずかしながら、実のところ、私は時々駒澤の大学院生

にそのような無茶ぶりをしてしまいます。ハイ）IP は初回の段階で、姉と母親は2回目の段階で、個人面接を希望されたようですが、例えば、その希望・ニーズに敢えてすぐに応えずに、3人での家族合同面接あるいは母親・姉の合同面接を続けるという選択を試みたらどうなったかな～と妄想してみました。確かに最初の「姉の PC 役割の弱化」という方針であれば、それは一見、姉個人が取り組む課題なので、姉の単独面接への移行は当然と思われるかもしれません。でも、その姉の PC 役割は、「家族システムの歴史的な相互作用の中で形成されてきたもの」であると考え、その相互作用を目前で見立てながら介入できる「合同面接の中での姉の PC 役割の弱化」も可能だったのではないかと思えました。それは同時に「IP の橋渡し役から降りること」「母親の親役割の強化」という方針もまた合同面接において行われることにもなりますよね。

ちなみに合同面接を継続させる誘い方としては、私だったら「毛糸がぐちゃぐちゃになっているのを少しでもほぐすために、まず何回か3人で一緒にお話し合いをしませんか？」とか「爆発せずにお母さんやお姉さんに辛さをぶつけられるような話し合いを少し3人でしてみませんか？」などとお誘いしながら、3人の合同面接を続ける可能性を探るかなと思いました。

今回のこの事例では、土屋・林・戸田さんの3人が、そのチーム内でおそらく緊密に情報交換したことによって、それぞれの個人面接がより家族合同面接に近い状態になったのだと思います。（この辺のチームの連携・情報交換の仕方なども、このケースにおいては重要な要素だったので、論文の中で少しでも描いてほしかったですね～。その連携の仕方についても個人的にはとても興味深いです！）考えてみると、1つのケースに3名の当事者がいて、それぞれがしっかりとケースについての情報交換や話し合いをして、そのバックにもう一人スーパーバイザー役割（インテーク担当の教員）がついている、なんていうチームの編成は、臨床心理の大学院でしか

できないでしょうね。多くの実際の臨床現場では（スーパーバイザーがいない、マンパワーが足りない、そこまで同僚が仲良くないなど？）なかなかこのような緊密な連携が上手くとれないことが多いものです。

家族システムにおける父親の捉え方は「遊離状態」だけでしょうか？

面接には登場していない父親は、家族システムの中では「遊離状態」と見立てていますね。「遊離」とは「離れた存在」という意味です。うーん、私自身が男（あるいは同じ2人娘の父親）だからでしょうか、父親がIPと原付の練習をしたというエピソードを聞いただけで、この家族の中でお父さんが「遊離」しているというイメージは、だいぶ薄くなってしまっているのですが、実際のところはどうなのでしょうね？もう1つ、インテーク面接で母親が語っている「この中に父親が入るとみんなが話せなくなる」というセリフは、どういう意味だったのでしょうか？インテーク担当の先生が、そこからその後どのように尋ねられていったかは分かりませんが、私だったら、その母親の言葉に対して「どうしてお母さんはそう思われますか？」「お姉さんやIPさんも同じように思いますか？どうしてそう思います？」などと、母親や娘たちが抱えている父親イメージをさらにお聴きしていくかなと思いました。それは面接に登場してない家族構成員については、早いうちからそのイメージを聴いておいた方が、家族システムの見立て（あるいは仮説の設定）のバリエーションが増えて（複数の仮説の設定）、それに伴って複数の介入のアイデアが浮かべられることが多いからです。

またまた私の妄想で恐縮ですが、この家でのお父さんは電気・機械などモノ担当だったかもしれません。原付の練習をつき合うように、家の家電を買ったり、切れた電球を取り替えたり等など、特に子育ての心理的な面は母親にお任せで、父親はもっぱらそのような具体的なモノを通して娘たちと関わってきたというイメージを想像してみました。

こんな感じで、IP・CI・母親という女性3人のサブシステムに対して、父親がどう絡んで家族システムを形成しているかというイメージを持つことも、見立てとして重要なのではないかと思います。このような登場していない構成員のイメージの情報収集も含めて家族システムの見立て・仮説設定を行うことで、このケースにおいて父親が面接に登場しなくても、ある時には父親に動いてもらう・一肌脱いで

もらうなどといった課題・介入プランの採用という可能性も広がり、IP・CI・母親の三角関係の変化の新しいあり方も模索できたかもしれないと思われました。

セラピストである土屋さんの驚き・感心のコメントは意図的でしょうか？

土屋さんは様々なフィードバックをCIに対してされていますね。例えば、#4ではく小さいころからのお話を色々聴かせてもらっていると、すごい頑張っているんやなって思います>と述べたり、#10では「見守ることもサポート」だというCIの気づきに<そんなこと気づいたのはすごいですね>と伝えたり、#11ではCIの「すごいでしょ？賢いですか？」という語り<賢い！>と返したり等など、土屋さんは自分の感じたことを素直に言葉でCIにフィードバックしているな～という印象を持ちました。その影響もあってか、とても自然で力が入っていない良いCIとThの関係（治療システム）が形成されていたのだらうと思います。本当にジョイニングがお上手ですね。

私もいろいろなケースで自分の感情をその場で言語化する「感情のフィードバック」を使ってジョイニングをしていくことは多いですが、特に「驚き」や「感心」の感情を使おうとする時は、「ここで使うのが良いかな？」「ここは抑えた方が良いかな？」などと、一瞬意識（あるいは意図）しながら使う（あるいは使わない）ようにしています。それはなぜかと言うと、「驚きの感情は、クライアントにはとても影響力が大きい強力なもの」だからです。やはりクライアントにとって、セラピストが感心したり、驚いたりすることは、とても嬉しいもの。特にこのCIについて考えてみても、小さい頃から母親からのポジティブ・フィードバックは、少なかつたと十分に考えられるので、ましてや同性Thからの感心・驚きによるフィードバックは、このCIの変化を推し進めることに強力に働いていただろうと思われま

す。ちなみに「驚きのフィードバック」を抑える場合とは、例えば、クライアントの変化が急激すぎて、セラピストがついていけない感じをもった時などがあげられます。そんな時は「驚き」よりも「どうしてそうした（思った）の？」という「問い」を投げかけることが多いですね。そのようなセラピストの「問い」によって、クライアントの暴走(?)をちよっぴり抑止する効果を狙っているのです。

いずれにせよ、「驚き・感心のフィードバック」に

については、セラピストとして特に意識的に使えるようになりたいものです。東先生も述べられているように、さらにそのフィードバックの仕方に強弱をつけられるようになると、それは強力な武器になりますよ～！

土屋さんのこのケース対応を読ませてもらって、あらためてセラピストの感情的な反応の仕方1つでセラピーの展開が変わってしまうもの、セラピストの反応も1つの大きな介入なんだと考えさせられました。

最後に：多面的・多声的な学びをされましたね

思いついたままに書いてしまいました。やはり、まとまりがなくてごめんなさいね。本来ならば、土屋さんや他のお二人（可能であればインテーク担当の先生）とご一緒に直接会って質問などしながら、コメントできれば、もう少し土屋さんにとってお役に立てるコメントができたかもしれません。残念ながらそれができないが故に、勝手に妄想を駆使してコメントしたので、実際のケース状況が分かっていない一方的な勘違いなことを書いてしまったかもしれません。もしそのような部分があったら、お許し下さい。

このケース全体を見てあらためて思うことは、「チームでセラピーをする良さ・可能性」を感じました。土屋さんが最後に「一つの面だけでなく多方面からCI個人考察することができた」と書いておられますが、土屋さんがセラピストとして「PCであるCI」という見立てが、悪しきレッテルにならずに良いセラピーが展開できた要因の1つには、チームでの緊密な連携があったからではないか、と私は勝手に想像（妄想？）しています。CIが語る母親とIPについて、母親が語るCIやIPについて、IPが語る母親やCIについて、当然同じようには語られない・描かれぬことも多かつたでしょう。その差異・ズレについてチーム内でしっかりと情報交換・分かち合うことによって、それぞれの人物の多面的な考察と家族システムの緻密な見立てが可能になったのではないのでしょうか？

私の好きな言葉に「動きながら、考え、考えながら、動く」というのがあります。心理学を勉強して人間心理の複雑さ多面性を知ることも大切ですが、それ以上に色々な人と出会い、意見などを分かち合いながら多様な考え方・ものの見方を共有していくこと、つまりナラティブなどで言われている「多声性」という考え方も、これからの心理臨床活動では、

とても大切な動き方・考え方だと思います。

土屋さんはこのケースで家族から学んだことに加えて、チーム内での連携・情報交換の大切さということも学ばれていると思います。この事例によって、そのような多面的・多声的な経験・学びをしていることに大いに自負を持って、これから携わっていくであろう新しい心理臨床活動の現場に臨んでいって下さいね。

土屋さん（+林・戸田さん）の今後の臨床心理士としての活躍に期待しています。